

令和七年度入学式 式 辞

新入生の皆さんご入学おめでとうございます。これから始まる滋賀大学での学生生活に期待をふくらませているものと思います。皆さんのご両親やご家族もさぞかしお喜びのことでしょう。桜も満開となり、皆さんの門出を祝っています。コロナ禍も収束し、六年ぶりにこのように入学生全員が一堂に会して盛大に入学式を挙行することができ、皆さんの一生の思い出になると思います。教職員一同、皆さんのキャンパスライフをしっかり支えていきます。大学や大学院で経験するさまざまな課題に積極的に取り組み、充実した大学生活を送ってください。

幸いコロナ禍は収束しましたが、その後も世界は未曾有の変化に見舞われています。皆さんはこれから激しく変化する世界に直面することでしょう。ここでは、皆さんが直面する二つの大きな変化についてお話ししたいと思います。一つは世界の紛争です。二つ目はデジタル分野での日本の遅れについてです。まず世界の紛争についてお話ししたいと思います。三年前の二月二十四日に始まったロシアによるウクライナ侵攻は長期化し、まだ終わりが見えてきません。大国の人的犠牲をいとわない攻撃の前に、小国が自身の領土と独立を守るために戦っています。また一昨年十月七日にはイスラエルとハマスの間の戦争が始まりました。この戦争も先行きが見通せません。どちらの戦争でも、町が破壊され、犠牲者が増え続けている状況です。戦争が長引き犠牲者が増えるごとに、憎しみの連鎖が続いていきます。第二次世界大戦後、さまざまな紛争があったものの、世界が発展し、だんだんと平和になっていくと思っていたものが、これらの戦争の勃発によって平和への希望が打ち砕かれたように感じます。第二次世界大戦以前の百年前の世界に戻ってしまったかのような感じさえあります。昨年秋のアメリカの大統領選挙でも「力による平和」という言葉が使われました。ロシアによるウクライナ侵攻もイスラエルとハマスの戦争も、残念ながら当面は力による平和という形で一定の収束を見せるかも知れません。しかしながら、それは永続的な平和にはつながらないと思います。それが第二次世界大戦で人類が学んだことではなかったでしょうか。アメリカ、中国、ロシアという大国の政治経済状況も不安定な要素を含んでいます。ヨーロッパにおいても自国中心主義の勢力が拡大しています。

このように世界は不安定になっていますが、幸い平和な日本に住む私達は、この平和を積極的に守っていくことが重要です。いま日本には外国から多くの旅行者が来ていますが、その一つの理由は、日本が平和で安全だからだと思います。平和や安全に価値があるわけです。平和や安全は、当たり前のもの、あるいはただで手に入るものではなく、積極的に守る価値のあるものです。平和で安全な国が発展することによって世界の平和に貢献する。そのことが我々に求められていると思います。

永続的な平和のためには、人種や文化が異なっても相手の存在を認め、暴力に訴えず話し合いで解決していくことが必要です。これは一言でいえば「多様性を尊重する」ということになると思います。多様性の尊重は社会のさまざまな場面で強調されてきたのですが、最近では、戦争の影もあり、特定の集団の正当性のみを主張する傾向が強くなっています。特定の立場のみを正しいとする主張は、単純でわかりやすいという面があります。しかし実際には世界は多様で複雑です。これから滋賀大学で学ぶ皆さんには、単純な主張を鵜呑みにせず、様々な観点から社会を眺める素養を身に付けていただきたいと思います。日本は平和で安全で、ともすると外国の紛争なども報道で見るだけの遠くのものと感じてしまうこともあります。しかしながら、世界が不安定化する中で、日本は日本だけで存在することはできません。日本の経済は世界との貿易で支えられています。日本の食料自給率は四割程度ですし、エネルギー自給率は十数パーセントしかありません。日本はその強みを活かしつつ、世界の中でルールを守り競争していかなければなりません。滋賀大学は「湖国から世界へ」というキャッチフレーズを使っています。皆さんには世界の動きを見据えて学びを深めていただきたいと思います。

次にデジタル分野での日本の遅れについてお話したいと思います。日本はこの分野で世界に遅れています。これについては、スイスにあるビジネススクールのIMD（国際経営開発研究所）が発表している世界デジタル競争力ランキングがよく引用されます。昨年のランキングでは、六十七の調査対象国・地域のうち、日本は総合順位で三十一位でした。世界一はシンガポールで、六位は韓国でした。さらに「デジタルスキルの習得」という項目では日本は最下位の六十七位、「ビッグデータや分析の活用」という項目では六十四位と惨憺たる結果でした。一方で「百人あたりのブロードバンドの普及率」では二位、「世界のロボットに占めるシェア」では二位と大いに健闘していました。健闘しているのはハードウェアの分野ですから、日本が遅れている分野はソフトウェア分野であると考えられます。私達の日常生活でも、ウェブの検索はグーグルを使うことが多く、ネット通販ではアマゾンを使うことが多いと思います。GAF Aとよばれるこれらの企業は、世界的なプラットフォーマーとしてサービスを提供しており、私達がこれらのサービスを利用すると、そこから得られる収益はGAF Aのものとなります。このような日本の赤字を表す数字が「デジタル赤字」です。財務省が二月に発表した昨年の国際収支状況速報によると、日本のデジタル赤字は六兆六五〇七億円となり、過去最高を更新しました。日本人一人当たりで考えると、ひと月数千円の赤字です。このデジタル赤字は外国人が日本を訪れることによるインバウンド黒字より大きいものです。このような日本の遅れを解消するために、皆さんには、デジタル技術を身に付け、積極的に活用してほしいと思います。

デジタル技術の中でも注目されるのは生成AIです。二〇二二年十一月に登場したChatGPTは大きな驚きを持って迎えられましたが、その後の発展も著しく、今では大学入試問題も解けるようになっています。滋賀大学は生成AIに関するガイドラインを設定し、積極的に活用する方針を掲げています。そして国内の他の大学に先駆けて、この四月一日よりChatGPTの教育版を大学として正式に導入しました。生成AIの利用にあたっては、出力される情報が不正確であり得ること、また著作権侵害があり得ることなど、注意が求められます。また悪意を持って生成AIを利用すると、偽のコンテンツやフェイクニュースを作成することも可能です。新しい技術には負の側面があることも事実ですが、このような側面を理解した上で、皆さんにはAIに使われる人材ではなく、AIを道具として正しく使いこなす人材になってほしいと考えています。

以上述べてきたように、世界は未曾有の変化に見舞われています。しかし、大きな変化の時代は、不安の時代であるとともに、可能性の開けた時代です。高校までの学びでは、大学入試への準備もあり、皆さんは正解のある問題を解き、正解を早く見つけるような訓練をしてきたと思います。しかしながら、未来がどうなるかについて唯一の正しい答えがあるわけではありません。大学での学びを通じ、あり得るさまざまな未来の中から、皆さんが未来を選びとっていくのです。滋賀大学の中期目標のキーワードは未来創生大学です。皆さんが滋賀大学での学びを通じて、未来を切り拓く人材に育ってくれることを願っています。

令和七年四月四日

国立大学法人滋賀大学長 竹村 彰通